

# 梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像

竹村 則行

## 一 はじめに

白居易「長恨歌」や白樸「梧桐雨」の後を受けて、楊貴妃故事を情の主題の下に集大成した清・洪昇の『長生殿』全五十齣中には、多様な楊貴妃像が描かれる。一方では、むしろ「長恨歌」以来のロマン溢れる好ましい楊貴妃像を忠実に継承しているものの、一方では、必ずしもそうではないヒステリックな楊貴妃像も併せ描かれる。中でも第十八「夜怨」・十九「絮閣」齣中に見える次の場面は、悪女<sup>アクメ</sup>楊貴妃を描いて、『長生殿』全五十齣中でも際立って異色である。いま、梗概と引用とで簡単に紹介する事にする。

まず第十八齣「夜怨」では、玄宗の寵愛を一身に魅きつける事に成功したかに見えた楊貴妃であったが、ライバル梅妃への玄宗の寵幸が再び復活した事を知り、楊貴妃が悶々として梅妃への怨み言を述べ、未明にも関わらず、二人の密会の現場へ乗り込もうと息巻く場面がある。中に、次の如き楊貴妃の獨白があり、ライバル梅妃への感情的な憤言が露わである。

奴家楊玉環、久しく聖眷を邀<sup>まね</sup>へ、愛もて君心を結ぶに、耐へ<sup>ぞ</sup>し、梅精江采蘋、意相ひ下らざるを。恰も好<sup>も</sup>し、聖上に觸<sup>ふ</sup>けければ、他をば樓東に還置<sup>はな</sup>す。但だ恐る、采蘋の巧計、天を回ら

し、皇上の舊情未だ断えざるを。此に因りて常に自ら隱防<sup>おんぼう</sup>す。唉、江采蘋、江采蘋、是れ我の心を容れ得ざるに非ず。只だ怖る、我れ心を容るるも、你就ち我を容れ得ざらんを。

續いて第十九齣「絮閣」には、玄宗と梅妃の密会の現場に乗り込んだ楊貴妃が、目ざとく梅妃の鳳扇を見つけ、玄宗に激しく詰め寄る場面がある。當の玄宗はあくまで白を切り、楊貴妃をなだめにかかる。

(旦、看るを作す科) 呀、這の扇底下、是れ一雙の鳳扇ならずや？  
(生、急ぎ起き、掩はんと欲するを作す科) 那裡に在りや？  
(簾より翠細を挿出す科) (旦、拾ひ看る科) 呀、又是れ一朵の翠細、此れ皆婦人の物なり。陛下<sup>きやう</sup>既然に獨り寝むに、怎んぞ此れ有るを得んや？  
(生、羞づるを作す科) 好に奇怪なり！ 這れは是れ那裡より來れるぞ？ 寡人すらも解せず。

やがて玄宗の心無い厭離に激昂した楊貴妃は、次の北水仙子調に寄せて、梅妃を激しく罵り、玄宗に切なく訴える。

【北水仙子】問ふ問ふ問ふ問ふ、華尊の嬌は、怕る怕る怕る、樓東の花の更に好きに似かざるを。有り有り有り有り、梅枝兒の曾て先春を占むるに、又た又た又た又た、何ぞ梅樹の牽纏<sup>けんてん</sup>を用ひんや。  
(生) 寡人の一點の真心、難道<sup>なんど</sup>妃子還ほ曉らざるか。  
(旦) 請ふ請ふ請ふ請ふ、真心の故交に向ひ、免よ免よ免よ免よ、

人の怨みて妾を情薄しと爲すを。

ここで楊貴妃は、一度は疎んじられたはずのライバル梅妃が再び玄宗の寵愛を受けている事を知り、激しい嫉妬心に驅られる。そして全く抑制が効かないまま、すさまじい劍毒で翠閣の密會現場に乗り込み、玄宗との間にあられもない派手な痴語喧嘩を展開するに及ぶのである。また同じく第六齣「傍訝」には、就國夫人との醜聞に絡んで、次の様に楊貴妃のきつい性格を描寫している。

(丑〃高力士) 思想ふに楊娘娘は、嬌柔の性、天生<sup>そんざう</sup>ぶだ利害<sup>りがい</sup>し。前時は梅娘娘に逼<sup>おさ</sup>りて、直に樓東に逼置<sup>おさ</sup>して奈ともする無し。

ところで、ここにあげた嫉妬深くてナーバスな楊貴妃像は、周知の様子に、従来「長恨歌」や「梧桐雨」を通してよく知られている清楚でロマンチックな楊貴妃像とは全く別人の趣がある。むしろ、人間像は表象として常に多様性を持つものであり、この兩極端の楊貴妃像もその多様な人間像の忠實な表明だと考えられぬこともないが、問題はそれほど簡単ではない。というのは、冒頭に述べた『長生殿』における嫉妬深くてナーバスな「悪女」楊貴妃像は、實は明らかに依據したと思われる故事典拠が存在するからである。その故事の引用の仕方、及び『長生殿』全體の楊貴妃像との関連については、やはり『長生殿』研究の一環として十分な検討を要する課題であらう。

没後千二百餘年を経た今日まで、美女としての傳承が喧しい楊貴妃について、冷靜且つ批判的に描寫する文獻は、私見によれば、後述の陳鴻「長恨歌傳」が最初であるが、冒頭に述べた『長生殿』第十八・十九齣の楊貴妃の直情徑行の行動は、實は楊貴妃批判を顕わした南宋・閩名作の通行本「梅妃傳」に直接に依據する。

「梅妃傳」は楊貴妃のライバル梅妃を主役に仕立てて顯彰した小説

梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像

であり、梅妃を崇高で清純な女性として描いた結果、楊貴妃は相對的に癡症でヒステリックな悪女の面が強調して描かれている。冒頭に紹介した楊貴妃が玄宗と梅妃の密會の現場へ息荒く乗り込み、派手な痴語喧嘩を繰り廣げる場面などは、正しくこの通行本「梅妃傳」において初めて設定された興味津津たるストーリーである。實は梅妃は史上に存在しない架空の理想の女性であった。『舊唐書』『新唐書』『資治通鑑』等とその名が見えぬのは、逆に梅妃がそれらの史書の出現以後に構想された事を推測させる。後にやや詳しく述べるが、しかし、梅妃は虚像の女性であっても、否むしろそれ故に、文人の好みのままに實によく出来た理想の女性像であった。その後に梅妃に言及し、或いは梅妃を主要人物として登場させる文學作品が陸續と現れることも、このことの有力な證明である。中でも明・吳世美の『舊唐書』は、梅妃を主役に拔擢し、楊貴妃を脇役に格下げして描いた出色の南曲である。洪昇は『長生殿』の特に第十八・十九齣の執筆については、これら「梅妃傳」「舊唐書」に大きなヒントを得ていたであらう。

楊貴妃の實像が果してどの様なものであったか、今日では既に知る由もなく、我々はただ白居易「長恨歌」等の作品によって類推するばかりは無い。楊貴妃没後五十年に詠まれたとされる白居易「長恨歌」すらも、既に楊貴妃傳説の所産であったのであり、かの白居易とて、自らが楊貴妃を賞見することは無かったのである。その意味で、今日に至るまで、我々は虚像と想像を綯い交ぜにして、糾纏な美女の楊貴妃像を勝手に作り上げて来たと言え言える。従来楊貴妃作品では、白居易「長恨歌」の如く、楊貴妃を絶世の美女として捉える見方も主流としてあったか、一方において、傾國の悪女、楊貴妃を批判する作品も確かにその對極に存在した。「梅妃傳」はその典型であり、後に

紹介するこの作品において、我々は理想の美女梅妃とは對照的に、楊貴妃が嫉妬深い寵姫の女として描かれている事を知る。冒頭の楊貴妃の派手な痴話喧嘩の描寫は、實にこの通行本「梅妃傳」に出據しており、その他の「長恨歌(傳)」「太真外傳」等の作品には皆目見えぬものである。

それでは、作者の洪昇は、何故このような悪名高い楊貴妃故事を『長生殿』中に取り込んだのであろうか。『長生殿』は作者も明言する通り、玄宗と楊貴妃の純粹の愛情を詠むことが主題であつたはずだが、その至上命題と、この梅妃に絡んだ悪女楊貴妃のニビソードとは相矛盾しないのであろうか。

本稿では、以上の経緯を念頭に置き、從來全く検討される事が無かつた『長生殿』第十八・十九齣に描かれた異色の楊貴妃像を、特に梅妃故事との関連において考察してみたい。

## 二 「梅妃傳」について

この章では、梅妃故事を述べた「梅妃傳」の由来について考えてみる。いま、通行本「梅妃傳」の梗概は次の通りである。

梅妃は姓は江氏、名は采蘋、福建莆田の人である。開元中、この地へ使した高力士がその美貌を発見して長安に連れ歸り、梅妃は玄宗に侍して大いに寵幸を得る。梅妃は梅を好み、居宅の欄干に悉く梅を植え、また梅の花見の時分には夜遅くまで花下に佇んで梅花を玩賞した。そこで玄宗は彼女を「梅妃」と名づける。

時に天下太平であり、玄宗は兄弟と仲睦まじかつた。御賜の楫を諸王に頒布した際、漢王が梅妃の足を踏んで戯れたので、梅妃は急病と稱して竟に姿を見せなかつた。後に玄宗が梅妃と園茶の遊

びをした時、玄宗は諸王に「この者は梅精だ。白玉笛も驚鴻舞も實にうまい。今回の園茶でも朕を負かした」と言つたので、梅妃はすかさず、「草木の戯れでは誤つて陛下に勝ちましたが、天下を調理する事にかけては妾は勝負にもなりません」と返して玄宗を大いに喜ばせる。

やがて楊貴妃が入内して來たが、おとなしい梅妃は臂に長けた楊貴妃の敵ではなく、局に上陽東宮に遷される。後に玄宗は梅妃を忘れかね、戯馬を以て密かに華華西園に召して寵愛を競した。ところがその現場に、事情をかぎつた楊貴妃がすごい劍幕で乗り込んで來る。楊貴妃は御榻下の鳳扇を見つけ、玄宗に詰め寄るが、玄宗は何とかその場を言い繕う。後に梅妃は「樓東賦」を詠んで閨怨を述べる。また玄宗が下賜した眞珠に對して、梅妃は七絶一首を詠むが、玄宗はこれを更に樂府「一斛珠」に制作する。

やがて安祿山の亂が起り、楊貴妃は死ぬ。都に遷御した玄宗は必死に梅妃の行方を尋ね求めるが分らない。ある時、夢の御告げを得た玄宗が華清池の梅樹下を掘ると、廊下に刀痕のある屍が出土したので、玄宗は妃の體を以て手篤くこれを葬った。

本文一三五〇字を精約した簡略なこの梗概からも、『長生殿』第十八・十九齣における楊貴妃が玄宗と梅妃の密會現場に乗り込む場面、及びそれに付隨して、楊貴妃を嫉妬深い悪女として描く描き方が、實にこの通行本「梅妃傳」に出據する事が明らかである。

さて、今日通行の「梅妃傳」の作者について、次に掲げる書迅以前の明・清・民國の叢書類は、概ね「唐・曹邕」とする。

明・陶宗儀『說郛』卷三八

明・顧 元慶 『顧氏文房小説』

明・顧 名 『五朝小説』

明・秦淮寓客 『綠窗女史』

明・馮 夢龍 『情史類略』 卷十四

清・馬 俊良 『龍威秘書』

清・王文韶他 『唐代叢書』 (唐人叢書)

民國・吳曾祺 『舊小説』

これら數百年に亘る作者名の誤記は、民國の魯迅に至って初めて明確に糾正された。即ち、『中國小説史略』に次の指摘がある。

「梅妃傳」一卷、亦た撰人無し。…末に署名せざるも、蓋し亦た即ち本文を撰せし者ならん。自ら葉夢得と同時と云ふは、則ち(宋)南渡前後の作なり。今本或ひは「唐・曹鄴撰」と題するも、亦た明人妄りに之を増すなり。

明人の誰が一體何の目的で作者を「唐・曹鄴」に擬定したのか、具體的にはなお不詳であるが、魯迅の指摘はやはり重みがある。「梅妃傳」中の梅妃が異常に梅を嗜好した事や調茶の風習、更には瘦せた梅妃が太った楊貴妃を罵る場面等から考えれば、やはりこれは唐人作とするよりは、宋人の筆に成ると考える方が現實的で妥當であろう。

そして、何よりも「梅妃傳」宋人作を決定づけるのは、魯迅も注目したその跋語である。

此の傳は萬卷朱邊度の家より得たり。大中二年七月書する所にし、字も亦た頗好なり。…惜しむらくは史に其の説を逸す。略ぼ條洞を加へて體語を曲飾するは、其の實を没するを懼るればなり。惟だ葉少蘊も余と與に之を得しも、後世の傳は或ひは此の本

梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像

に在らんか。

この跋語によれば、大中二(八四八)年の體語がある原本「梅妃傳」は朱邊度が舊藏していたものであり、宋の大儒葉夢得(字は少蘊)の發掘にかかり、そして跋語の作者たる無名氏がかなりの修飾を加えて、今日の通行本に仕立てあげたものとなる。朱邊度に就いては『宋史』卷四三九、『東都事略』卷三八、『臨平集』卷十三、『無氏筆乘續集』卷七、『十國春秋』卷七五等に記述を有する。いま「十國春秋」の記事を引けば次の通りである。

朱邊度は青州の人なり。家に藏書多く、周覽略ぼ遍く、當時推して博學と爲し、稱して朱高卷と曰ふ。…後に金陵に徙居し、高尙にして仕へず。

これらの記述を總合すれば、朱邊度は唐宋十國の楚の人であり、後に金陵(南京)に移居して終生仕えなかつた民間の大藏書家であつた。一方の葉夢得は、周知の如く『宋史』卷四四五に本傳を有する北宋南宋間を生きた著名な大文人である。(ただ葉夢得が「梅妃傳」に言及した記事は、まだ檢索し得ていない。)

こうして、通行本「梅妃傳」の跋文を讀む限りでは、現行の「梅妃傳」の作者(闕名)と葉夢得とは南宋の同時代人であり、原本「梅妃傳」の舊所藏者たる朱邊度は、それより約二百年も以前の唐宋十國時代の南京の大藏書家ということになる。葉夢得は南宋の初めに建康(南京)の知事を拜命したので、ここにいう「梅妃傳」は或いはその時に收書されたものかも知れないが、確證に乏しい。

ところが、ここに通行本と異なる別本「梅妃傳」が存在する。全三六二字、通行本の全一三五〇字に比べて約四分の一の簡略な小説である。いま兩者を比較すれば、今日の通行本が増益した記事内容とし

て、

① 御賜の禮を諸王に頒布した際に、漢王が梅妃の履を踏んで戯れる事。

② やがて嫉妬深い楊貴妃の爲に上陽東宮に遷された梅妃に、玄宗は密かに翠華西閣で會うが、その密會の現場に楊貴妃が息荒く乗り込んで来る事、及び一連の痴話喧嘩の経緯。

③ 梅妃が司馬相如の「長門賦」に倣つて閨怨を詠んだ「樓東賦」の全文。

④ 楊貴妃への荔枝使者到來の故事。

⑤ 安祿山亂後に長安に還御した玄宗が、贖資金を出して梅妃の行方を探し求めた事。

⑥ 玄宗が夢で、腦下に刀痕の残る梅妃の屍を探し當てた事。等々の記述が擧げられる。更にこの別本には、末尾に分ち書きで、

此傳葉石林得之朱邊度家。乃唐大中二年七月所書云。

と雖すが、通行本に見られる跋語や贊語は無い。以上の通行本、別本の「梅妃傳」を比べてみるに、既に盧兆蔭、趙克勤氏も推定する様に、この別本「梅妃傳」は通行本の藍本であり、通行本「梅妃傳」の作者が「略ぼ脛測を加へて舊語を曲循」して今日の通行本に仕立てあげたものと考えられる。跋語に云う「後世の傳は或ひは此の本に在らんか」とは、事實その通りになったのだが、「梅妃傳」修改者自身の高らかな精神を示したものであるう。また、薛洪勛氏が指摘する如く、宋・葉廷珪『海錄碎事』卷十下に引用する簡潔な「梅妃傳」も、この藍本「梅妃傳」の系統に屬するものと思われる。

以上を要するに、「梅妃傳」は唐大中間とされる原本の所在は分らないものの、宋人の大幅な修改を経て、梅妃と楊貴妃の興味溢れる種

々の逸話が四倍にも擴大された。この過程において、架空の理想たる清楚な梅妃像とは對照的に、嫉妬深くヒステリックな悪女の楊貴妃像が増幅強調されたものと思われる。そして、「梅妃傳」は明代以降の叢書類において作者も「唐・曹鄴」に擬定され、今日に至る流行を見ているのである。

### 三 『驚鴻記』その他について

以上述べた様に、梅妃は全く架空に案出された理想の虚像であった。だが、實在する楊貴妃とは違つて、實像の制約にとらわれずに自由に想像された梅妃は、却つて後世の文人の歡迎する所となつた。いま、宋・元・明・清及び現代に至る文學作品・書目中において、梅妃に言及する目ぼしいものを擧げれば、次の通りである。

- 南宋・闕名「梅妃傳」
- 南宋・尤袤「遂初堂書目」
- 元・白樸「梧桐雨」
- 明・陶宗儀「南村輟耕錄」
- 明・吳世美「驚鴻記」
- 明・屠隆「綵毫記」
- 明・周清原「西湖二集」
- 清・孫郁「天寶曲史」
- 清・褚人獲「隋唐演義」
- 清・洪昇「長生殿」
- 清・唐英「長生殿補闕」
- 清・石韞玉「梅妃作賦」
- 現代・京劇「貴妃醉酒」

いま、これらの作品における梅妃への言及の仕方について、「梅妃傳」「驚鴻記」「長生殿」を除いてコメントすれば、南宋・尤袤『遂初堂書目』には、雜傳類に「梅妃傳」の書名を記録する。恐らくこれは關名氏修改後の通行本「梅妃傳」を指すと思われる。元・白樸『梧桐雨』には、第二折の梨園弟子中に玉簫を吹く梅妃が登場するが、唱白は無い。明・陶宗儀『南村縣志』は、卷二五の院本名目中に「梅妃」の記録を有する。明・屠隆『綵毫記』では、第五齣に「梅妃驚夢」、梅妃怨の語があるが、梅妃は登場しない。明・周清原『西湖二集』では、卷十一「寄梅花鬼關西閣」中に、通行本「梅妃傳」に據って西閣における梅妃と楊貴妃の葛藤を活寫する。清・褚人獲『隋唐演義』では、終盤第七九回以降に點綴された梅妃故事は、實は、吳世榮『驚鴻記』をほとんどそのまま踏襲したものである。清・石韞玉「梅妃作賦」は、上陽宮に遷置された梅妃が「樓東賦」を詠んで慨嘆する場面を仕組んだものである。そして最後に、人口に膾炙した現代京劇「貴妃醉酒」は、玄宗との花見の約束を反故にされた楊貴妃が一人ヤケ酒を飲むという設定だが、實は玄宗は誰あろう梅妃の許へ行った事を知って、楊貴妃の憤怒のボルテージは一層高まるのである。(その他、楊貴妃故事に取材した現代小説の多くも梅妃に言及するが、ここには繰述しない)

以上に挙げた十数例からも、通行本「梅妃傳」の作者が「後世の傳は成ひは此の本に在らんか」と自負した豫測が見事に的中して、架空の理想像たる梅妃が後世の江湖の文人にいたく歓迎された事が明らかとなる。

さて、中でも『長生殿』との関連において注目されるのは、明・吳世榮『驚鴻記』である。『驚鴻記』が『長生殿』の先聲として注目すべき事については、既に徐朔方氏に次の鋭い言及がある。

梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像

洪昇は曾て『驚鴻記』について甚だ不満であった。しかし『驚鴻記』の「翠閣好會」「七夕私盟」「胡亥長安」「馬嵬殺妃」「父老還留」「馬嵬移葬」齣は、『長生殿』の「翠閣」「密誓」「馬賊」「埋玉」「獻飯」「改葬」齣に對して、多くお手本となつたであらう。『驚鴻記』が「仙客蜀來」「幽明大會」齣で完結するのも『長生殿』の先聲である。

『驚鴻記』は「梅妃傳」に基づいて、楊貴妃のライバルの梅妃を主役(旦)に仕立てた明・萬曆刊の南曲である。その筋立ては次の三十九齣で構成されており、梅妃を且に、楊貴妃を貼に仕立てて、梅妃の罵に大いに氣を吐いたものである。

第一齣	本傳提綱	第十六齣	梅妃宮怨
第二齣	梅亭私誓	第十七齣	洗兒賜錢
第三齣	相府稱觴	第十八齣	花萼覽裝
第四齣	幽賞伏魔	第十九齣	梅妃遣賦
第五齣	君臣宴樂	第二十齣	楊妃曉粧
第六齣	壽邸恩情	第二十一齣	翠閣好會
第七齣	花萼驚鴻	第二十二齣	祿山辭朝
第八齣	詭計陷梅	第二十三齣	七夕私盟
第九齣	楊妃入宮	第二十四齣	祿山叛逆
第十齣	兩妃妬寵	第二十五齣	大駕幸蜀
第十一齣	權奸獻諛	第二十六齣	胡亥長安
第十二齣	興慶宴樂	第二十七齣	馬嵬殺妃
第十三齣	梅妃被貶	第二十八齣	梅妃投瓶
第十四齣	梨園演樂	第二十九齣	父老還留
第十五齣	學士辭彈	第三十齣	諸臣追駕

- 第三十一 蜀道思妃 第三十六 入觀遇梅
- 第三十二 靈武破賊 第三十七 香囊起陣
- 第三十三 大駕還宮 第三十八 仙客蜀來
- 第三十四 南内思妃 第三十九 幽明大會
- 第三十五 馬嵬移葬

そして、その序「鼓驚鴻」「驚鴻記鼓」によれば、作者は次の如く、楊貴妃とは對照的に、史上に全く無視された梅妃について、科擧試に落第した自分の無念さを併せて、梅妃の爲に發憤し、切齒扼腕すること一月餘り、遂に『驚鴻記』を完成させたものと云う。

『驚鴻記』は余の友人仲子の爲す所にして、……(略)……仲子雅に才を負ひ、目に人士無く、尤も建安而下の諸詞賦を嗜く。一日制科の縛る所と爲り、悵快として余に謂ひて曰く、……(略)……蓋し扼腕すること月餘にして、『驚鴻』遂に成れり。(鼓驚鴻)

漁陽の變(安祿山の亂)、罪首は楊(貴妃)に歸し、而して采蘋(梅妃)は與らず。千秋萬祀、白郎の「長恨歌」を咏むに、楊(貴妃)の美を歎頌するも、江(梅妃)は即ち廣如たり。余謂へらく、江氏(梅妃)は絶代の姿を以て、極淫の主に通ふものにして、國を悞るの罪無し。正を守り死を俟つは、元始以來、女伴の希ふ所なり。(驚鴻記鼓)

更に、『驚鴻記』の大國圖たる第三十九「幽明大會」の總結詩にも次の様に述べており、吳世美は梅妃の「驚鴻舞」が白居易「長恨歌」中に記載されない事を慨嘆する。

驚鴻更是傾城舞 驚鴻は更に是れ傾城の舞なるに  
只少香山長恨歌 只だ少く 香山(白居易)の長恨歌  
以上の事例から、「長恨歌(傳)」「新・舊唐書」「資治通鑑」「太真

外傳」等に等閑視された梅妃への、吳世美の狂おしい程の思入れ、藝價は痛切に分るのであるか、惜しい哉、吳世美は梅妃の出自について根本から誤解している様に思われる。というのは、前章に述べた様に、通行本「梅妃傳」が南宋初に出現したものであるとすれば、それ以前に成った「長恨歌(傳)」「新・舊唐書」「資治通鑑」「太真外傳」等の諸書に「梅妃」の名が見えるべくも無いのである。恐らく吳世美は、明代當時の諸書中に「梅妃傳」の作者名を「唐・曹鄴」とするのをそのまま信じて込んで、かくも激越な藝價に驅られたものと察せられる。そして、『長生殿』の作者洪昇もまた、明清の諸書中の記述そのままに、「梅妃傳」唐・曹鄴作を全く疑っていなかったものの様である。

#### 四 楊貴妃に取材した作品

八世紀前半の中國唐朝に實在した楊貴妃については、同時代人の李白、杜甫を始めとして、今日の中國映畫『楊貴妃』に至るまで、詩・小説・戯曲等々の様々なジャンルに亘って種々に語り継がれて來た。次に、楊貴妃に取材した顯著な作品例を幾つか挙げる。

- 唐・李白「清平調詞」「宮中行樂詞」
- 唐・杜甫「麗人行」「哀江頭」
- 唐・白居易「長恨歌」
- 唐・陳鴻「長恨歌傳」
- 唐・元稹「連昌宮詞」
- 唐・杜牧「華清宮三十韻」
- 「過華清宮三絕句」
- 唐・張祜「華清宮和杜舍人」

唐・鄭 峒 「津陽門詩」

唐・溫庭筠 「過華清宮二十二韻」

その他、唐・王建、李商隱など多数。

五代・黃滔 「明皇通鑑經局冤賦」

五代・樂史 「太真外傳」

南宋・闕名 「梅妃傳」

元・王伯成 「天寶遺事諸宮調」

元・白 樸 「梧桐雨」

明・屠 隆 「採毫記」

明・吳世美 「舊鴻記」

清・孫 郁 「天寶曲史」

清・褚人獲 「隋唐演義」

清・洪 昇 「長生殿」

これらの簡略な一覽からも、盛唐中國の絶頂期に華々しく出現し、劇的に終焉した楊貴妃の故事が、當時はもとより後世の文人にとつて、如何に連綿として興味が盡きない恰好の題材であつたかがよく分る。まさしく楊貴妃は盛唐の繁榮と没落を象徴的に物語る絶好の話題であつた。ところが、この様な異常なまでの楊貴妃人氣とは裏腹に、實の所、楊貴妃の眞の姿を當時において確かに傳えた記録は皆目無いのである。楊貴妃の御前に侍つた翰林學士李白の「清平調詞」は甚だ夢幻的で事實の反映に乏しいし、「詩史」表現が期待される杜甫の「麗人行」では貧窮無名の杜甫は楊貴妃一族の華やかなパレードを遠くから見物する一般大衆の一人に過ぎない。その他、『新・舊唐書』『資治通鑑』等の「史實」を繕いても、基本的には當時に傳えられた楊貴妃傳説を忠實に記録しただけであり、記事の信憑性は樂史「太真外傳」

梅妃から見た「長生殿」の楊貴妃像

等とさして變らない。早い話が、楊貴妃の出生や慘死に關しても、正確には何一つ解明されていないのが實狀である。

こゝういふ楊貴妃故事の演變史をめぐる情況にあって、前掲の楊貴妃に取材した作品を主題に關する要素別に分類してみると、玄宗楊貴妃の純粹の愛情を強調する所謂稱賛派と、亡國の大亂を招いた責任を追求する所謂批判派とに大別することが可能である様に思う。(但しこれはあくまでも要素別の分類であり、全ての作品がこの様に截然と分れる譯ではない。同一作品が兩方の要素を兼ねる事も無論あるであらう。)その典型は、楊貴妃没後五十年に當る元和元(八〇六)年に早くも出現した。即ち、稱賛作品が白居易の「長恨歌」であり、批判作品が陳鴻の「長恨歌傳」であつたと筆者は考へる。「長恨歌」の主題をめぐつては今日まで議論が沸騰しているが、私は一つの考え方として、白居易の「長恨歌」はあくまで楊貴妃の愛情について稱賛する立場を貫いたし、『白氏文集』卷十二に附載する陳鴻の「長恨歌傳」は、むしろ冷靜且つ客觀的に楊貴妃を批判する見方が顯著であつたと思ふのである。いま、「長恨歌」はさておき、陳鴻「長恨歌傳」について見ると、その根據となるべき楊貴妃批評は、次の様である。

其の容を妖に<sup>よ</sup>し、其の詞を巧に<sup>よ</sup>し、歌舞談笑、婉娈便佞、以て上の心に中<sup>よ</sup>つ。

徒に殊艶尤態の是を致すに非ず。蓋し才智明慧、善巧便佞、意に先んじて旨を希ふに、形容すべからざる者有ればなり。

玉妃方に衰ぬ。贈ふ、少く之を待て。

意とする者は、但だ其の事に感ずるのみならず、亦た尤物を懲らし、亂階を望ぎ、將來に垂れんと欲する者なり。

そして、楊貴妃故事が早や過去の傳聞となりつつあつた中晚唐の詩

人間においては、陳鴻の如く、そこに「傾國」の教訓を読み取る事は士大夫としてむしろ當然であつたであらう。嘗の白居易でさえ、新樂府「李夫人」においては、「嬖惑に鑑みるなり」と題注して、

生も亦た惑ひ、死も亦た惑ふ

尤物は人を惑はし 忘れ得ず

人は木石に非ざれば皆情有り

如かず 傾城の色に遇はざらん

と述べる。微妙な言い回しながら、白居易はここで「尤物」<sup>ユウブツ</sup>、傾城の美女たる楊貴妃へ「惑ふ」戒めを説いているのである。

してみれば、玄宗楊貴妃の永遠不變の愛情を歌い上げた白居易の「長恨歌」は、楊貴妃故事演變史においては、むしろ例外的に異色であつたとさえ言えるであらう。しかし、それは白居易の「詩に深く情に多き」<sup>情に多き</sup>詩才によって巧みに修飾を施され、楊貴妃没後五十年において、その後に出現する楊貴妃取材作品の典型を形作ることになる。白居易自身も當時における「長恨歌」の流行を目撃しているが、その後に出現した詩・小説・戯曲等のいづれを取つても、また日本文學への影響においても、およそ楊貴妃に取材した作品で白居易「長恨歌」の影響を受けないものは無かつたと言つても過言ではない。

考えてみれば、白居易「長恨歌」の主題については今日も諸説紛々としてゐるが、少なくとも讀者たる私が素直に感動を覚えるのは、やはり楊貴妃玄宗の切々たる愛情表現の部分である。當時或いはその後において「長恨歌」を愛唱した人々もそうであつたであらう。更に言えば、元・白樸「梧桐雨」についても基本的に同様であらうし、清・洪昇「長生殿」についても然りである。「長生殿」の主題は玄宗・楊貴妃間の愛情であることは、次の第一齣「傳概」の表現から確認する

事ができる。

『蒲江紅』<sup>蒲江紅</sup> 今古の情場、問ふ誰か真心到底ならん。但だ果して精誠の散ぜざる有らば、終に連理を成さんのみ。……吾儕の義を取りて宮微を顧し、太眞外傳に借りて新詞を譜するは、情なるのみ。

今日「長生殿」が中國清朝を代表する戯曲として、また楊貴妃故事を集大成した文學作品として、白居易「長恨歌」や白樸「梧桐雨」と並んで稱賛されるのも、その最大の魅力は恐らくこの玄宗との純粹の情愛を天上で再會させる事で貫徹した点にあるであらう。決して「長恨歌傳」や「梅妃傳」の如く、楊貴妃を「傾國の惡女」として辛辣に批判する點に在るのではない。

## 五 「長生殿」と梅妃故事

洪昇は「長生殿」撰述の基本方針として、「例言」中に

史に楊妃を載するは汚亂の事多し。予の此の劇を撰するは、止だ白居易「長恨歌」・陳鴻「長恨歌傳」を接して之を爲せり。而して中間點架の處は、多く天寶遺事・楊妃全傳より采れり。若し一たび穢跡に涉らば、風教を妨ぐるを恐れ、絶えて闢入せしめず。覽者以て予の志を知る有らん也。

と述べる。ここには、從來の種々雑多な楊貴妃傳説のうち、洪昇が「汚亂の事」や「穢跡に涉る」故事を努めて排除し、専ら白居易「長恨歌」や陳鴻「長恨歌傳」を接して「長生殿」を撰述した事が述べられる。洪昇は「長生殿」の「自序」にも

凡そ史家の穢跡は、概ね創りて書せず。

と述べており、洪昇が楊貴妃故事の醜穢な部分を削除して、ひたすら楊貴妃の純愛を描こうとした事が明らかである。ただ、洪昇がここに

言及する「長恨歌」「長恨歌傳」「天寶遺事」「楊妃全傳」については、なお幾分の検討を要する。このうち、「中間に點綴」したという「天寶遺事」「楊妃全傳」については、固有作品名ではなく、「開元天寶遺事」「明皇雜錄」「楊太眞外傳」等を含む一般總稱であろうと思われる。ここで問題とすべきは、洪昇が「長生殿」楊貴妃故事の主要材料として擧げる白居易「長恨歌」・陳鴻「長恨歌傳」のうち、とりわけ後者である。即ち、前述の如く、「長恨歌傳」には多くの楊貴妃への貶辭を含み、必ずしも楊貴妃禮賛とばかりはいかないからである。ただ『白氏文集』卷十二には白居易「長恨歌」と共に陳鴻「長恨歌傳」が當初から併録されており、この両者が一體となつて楊貴妃傳説の形成と展開に與つて力があつたのは疑うべくもない事實である。洪昇がここで「長恨歌」「長恨歌傳」を併稱するのも、或いはその様な歴史事實を踏襲したまでのことかも知れない。

してみれば、この「長生殿」例言中に洪昇が標榜する「長恨歌」「長恨歌傳」とは、單に「長生殿」執筆の大原則を示したまでであつて、實際は洪昇は、當然ながらその他諸々の楊貴妃故事に取材した作品・記録類を取捨選擇して、『長生殿』五十齣を完成させた事が明らかである。

そして、その雑多な楊貴妃故事作品として、南宋・閩名作の通行本「梅妃傳」も例外では無かつた。というのは、冒頭に述べた「長生殿」第十八・十九齣中の玄宗梅妃の密會現場に楊貴妃が荒々しく乗り込む赤裸々な場面は、明らかに通行本「梅妃傳」に出據するからである。また「長生殿」自序には

南曲『鶯鶯』の一記は未だ穢に渉るを免れず。

とあり、洪昇が、「梅妃傳」を演繹した『鶯鶯記』を確かに讀んでい

梅妃から見た「長生殿」の楊貴妃像

た事が、はからずも明らかとなる。

それでは、「長生殿」中に點綴されたこれらの梅妃故事は、「長生殿」が忌み嫌つた「穢跡」には相當しないのであろうか。實はこのことは大きな問題として、『長生殿』成立の當初から議論があつた。というのは、『長生殿』例言に次の記述があり、「長生殿」における梅妃故事は、虢國夫人故事と並んで、とかく問題視された事情があるからである。

今「長生殿」世に行はるに、伶人繁長にして演じ難きに苦しみ、竟に倉壁の爲に妄りに節改を加え、開目都て廢す。吳子（山）、之を憤り、「墨愁十四種」に放ひて二十八折を更定し、而して虢國、梅妃を以て別ちて饒戲兩齣と爲すは、確當にして不易なり。

：近ごろ唱演家の改換するに、必ず従ふべからざる者有り。虢國承寵、梅妃忿爭の一段を増すが如きは、三家村婦の醜態を作し、既に蘊藉を失し、尤も觀るに耐えず。

これに據れば、友人の吳山が更定した二十八折本「長生殿」（今日の定本は五十折）とは別に、虢國夫人と梅妃を「饒戲」として別立ての「兩戲」に仕立てたものの様であるし、唱演された虢國夫人・梅妃故事に關する改定本は、醜態の極みで見られたものではないという。ここに述べる「楊妃忿爭の一段」とは、『長生殿』第十八夜役、十九齣間の兩齣に關わるものである。洪昇自身が記したこの例言の記述から、友人の吳山が「長生殿」における梅妃故事を別本の「饒戲」として扱つた事が明白となる。既に本稿第二、三章において述べた通り、「梅妃傳」「鶯鶯記」につなかる一連の梅妃故事中に現れる楊貴妃は、明らかに意圖的に癡症の「惡女」として描かれている。楊貴妃の派手な痴語喧嘩は讀者の好奇心をそそることはあつても、やはり白居易

易「長恨歌」に典型化されたロマン溢れる楊貴妃には相應しくないであらう。同様に、楊國忠との近親關係を云々される虢國夫人の故事も、杜甫「麗人行」詩に既に見られる如く、やはり譚聞故事である。その意味で、親友の吳山が『長生殿』の選本を作った際に、この虢國・楊妃にからむ兩劇を「饒劇」として別本仕立てで編成し直したのは、知音の士の賢明な見識であつたと言わなければならない。(但し、この二十八折「長生殿」教習本、及び別本の「虢國」「梅妃」兩劇とも、今日その傳本を見ることはできない。)

以上の事から考えれば、洪昇が『長生殿』例言に標榜する「若し一たび穢跡に涉らば、風教を妨ぐるを恐れて絶えて闕入せず」という執筆の基本方針は容認するとしても、實のところは親友の吳山も認める様に、少なくとも『長生殿』中の虢國、梅妃に關わる部分においては、やはり「穢跡」の殘滓を拂拭し難かつたというのが實情ではなかつたか。

## 六 まとめ

この章では、まとめとして、『長生殿』第十八・十九齣に梅妃故事を貼綴した事の文學的效果、及び洪昇の執筆意圖について、もう一度考えてみたい。『長生殿』第十九「紫閣」齣に、吳山注と思われる次の眉注がある。

客有り、嘗て驗す。此の劇の虢國・梅妃兩番の寵を爭ふは、皆未だ場に着つて扮出せず。關目顯さざるに近く、排場において楊・虢の相爭ふを加へ、然る後に放ち歸らしめんと欲すればなり。「紫閣」折中、盤を破りて出づる時に、梅妃場を繞りて走り下り、近ごろ演家の梅妃に扮するに、幔内に默坐する者有り。

この注によれば、『長生殿』中の虢國夫人や梅妃に關わる譚聞を詠んだ齣(筆者注・第五齣「寶壽」・第六齣「傍評」・第十八齣「夜怨」・第十九齣「紫閣」)は、當時既に演出上の様々な躊躇があり、注者はその扮演に強い難色を示している様に見受けられる。しかもこの眉注の口調は、前章に述べた『長生殿』例言に言う、

近ごろ唱演家の改換するに、必ず從ふべからざる者有り。虢國承寵、楊妃忿爭の一段を増すが如きは、三家村婦の醜態を作し、既に蘊藉を失し、尤も觀るに耐えず。

と正しく軌を一にする。そして、これらの注の表現内容から、『長生殿』成立の當初から既に、『長生殿』中に貼綴された虢國夫人・梅妃故事の是非をめくつて、とかくの議論が展開されて來た事が分る。いま、梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像について考察してみようとする時、洪昇或いはその親友によるこれら一連の發言は、實に重い内容を持つ。即ち、これらの發言は、『長生殿』における梅妃故事が實は『長生殿』の主題である鍾情とは相容れない異質の「穢跡に涉」りかねない不純の要素を具有している事を自から露呈しているからである。事程左様に『長生殿』における第十八・十九齣に貼綴された梅妃故事は、虢國夫人故事と並んで、如何にも興味本位で唐突であり、全體にそぐわない異和感を免れ得ないものであつた。

それでは作者の洪昇は、この様な異質で汚穢感さえある梅妃故事に插かれた楊貴妃像を、何故に『長生殿』中に貼綴したのであらうか。楊貴妃故事の「穢跡に涉る」部分を刪除するといふ『長生殿』の執筆方針からすれば、虢國夫人故事と共に梅妃故事も削除リスト中に入つても良かつたのではあるまいか。

今、この疑問について、作者本人でない筆者には容易に解答を出し

かねるが、参考までに、幾つかの意見を提出してみる。

(一) 洪昇は通行本「梅妃傳」の作者を唐・曹鄴とする明清時代の叢書に見られる誤った認識を、どうやらそのまま踏襲していたらしいこと。第二章で述べた如く、「梅妃傳」は南宋人の恣意的な改作によるものであり、そのために楊貴妃像が意圖的に改悪された認識を洪昇が持っていたれば、或いは『長生殿』第十八・十九齣の楊貴妃描寫は少し變ったものになっていただかも知れない。

(二) 通行本「梅妃傳」或いは『舊唐書』中に描かれた楊貴妃像を、洪昇はさまで「汚穢」とは感じなかったか。どういう描寫を「汚穢」と認識するか、今日も『猥褻』論議が喧しい(因に二十一「猥褻」齣は十分に猥褻である)。通行本「梅妃傳」に描かれた楊貴妃の直情徑行のヒステリックな行動も、善意に解釋すれば、玄宗の自分への寵愛を必死に護ぎ留めようとする楊貴妃の健氣な止むに止まれぬ純情な行動であるとの解釋も成り立たぬことは無い。これも著者自身で無ければ分らぬ事であるが、洪昇が「梅妃傳」中の楊貴妃の行動描寫について、さほど「汚穢」性を認めていなかったとすれば、この故事を『長生殿』中に點綴しても何等異和感は無かつたはずである。

(三) 或いは全く洪昇の不注意に據るか。

「例言」にも述べる通り、洪昇は『長生殿』の構想執筆に當って、白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌傳」を中核として、その他「楊太真外傳」を始めとして種々雑多な作品に述べられる楊貴妃故事を取捨選擇して『長生殿』を完成させている。その大原則としては玄宗楊貴妃の「鍾情」を標榜するものの、やはり幾らかの「汚穢」部分の混入を避けられなかったものであろうか。特にこの場合の虢國夫人、梅妃故事は歴史傳統があつて實に興味深い文學的虚飾が施されており、洪昇

自身、親友の吳山に指摘されるまで、『長生殿』における梅妃故事に淵源する楊貴妃像の異質感に氣付いていなかったのではあるまいか。

以上は、いずれも臆測に基づくものであり、著者の發言による裏付けを得た譯ではない。しかしながら、前述の親友の吳山による評價は却つて洪昇の代辦として貴重であり、右の幾つかの臆断が全ては當らないとしても、『長生殿』中に梅妃故事を畧んだ第十八・十九齣の異質性については確證を得たと言えるのではあるまいか。

今日、『長生殿』の評價については、『長恨歌』『梧桐雨』の後を承けて玄宗楊貴妃の純愛を描いたものとして高い評價を受けている。清・朱彝尊も『長生殿』序において、

其の用意は一に太眞の穢を洗へり。

と激賞する程である。この評は『長生殿』全體の評價としては肯定できる。しかしながら、『長生殿』には成立當初から梅妃、虢國夫人に絡んで、とかくの「穢跡」を云々される瑕疵を含んでいたこともまた一方の事實であつた様に私には思われる。

そして最後に、梅妃故事に伴う楊貴妃像の變化について、『長生殿』全體の流れから捉え直してみたい。

周知の様に、『長生殿』全五十齣は、楊貴妃生前の榮華を描いた前半二十五齣と、没後の天宮世界を描いた後半二十五齣とに二分される。就中後半二十五齣は、織女星の取りなしで玄宗・楊貴妃を中秋明月の夜に月の宮殿で再會させるなど、『長恨歌』や『梧桐雨』に描かれた夢幻の世界を更に發展昇華して團圓に導いている。

この中で、上述の様に梅妃故事は前半部分に於いて述べられるだけであり、後半には全く見えない。つまり、梅妃故事に伴う楊貴妃像の變化は、専ら梅妃に絡んで生前の現實の楊貴妃について描寫されたも



(16) 現代京劇「貴妃醉酒」の藍本に、清・葉堂撰『納書楹曲譜』補遺卷四所收「薛楊妃」がある。

(17) 洪昇曾經對「蕭鴻記」很不滿意。但是「蕭鴻記」的「翠閣好會」「七夕私盟」「胡亥長安」「馬嵬殺紀」「父老遇留」「馬嵬修葬」、對「長生殿」的「翠閣」「密誓」「罵賊」「埋玉」「獻飯」「改葬」、應該是多有過借鑑作用的。「蕭鴻記」全劇以「仙客局來」「國明大會」作結束、也是「長生殿」的先聲。

以上は「長生殿」校注本、榮頌方氏前言。また同氏「洪昇和他的「長生殿」」(同氏『戲曲雜記』上海古典文學出版社、一九五六年)。なお、王永建「洪昇和長生殿」(上海古籍出版社、一九八二年)にも同様の指摘がある。

(18) 拙稿「校注蕭鴻記・二・三」(『文學研究』九〇・九一・九二、九大文學部、一九九三・九四・九五)、及び「明曲「蕭鴻記」に描かれた虚像の極妃」(『白氏文集』六、季報、明治書院、一九九三年)参照。

(19) 樂極輝「蕭鴻記序」に「觀其曲、終似爲梅妃吐氣而作」とある。前稿「校注蕭鴻記・三」参照。

(20) 「蕭鴻記」者、余友人仲子所爲、…仲子雅負才、目無人士、尤等建安而下諸詞賦。一日爲制科所縛、但快爾余曰…蓋扼腕月餘、而「蕭鴻記」遂成。(前掲「校注蕭鴻記・一」参照。)

(21) 漁陽之變(安祿山亂)、薛平助楊(貴妃)、而采蘋(梅妃)不與。千秋萬祀、咏白郎(居易)「長恨歌」、歎彌陽(貴妃)美、江(梅妃)則處如也。余聞、江氏(梅妃)以絕代之姿、遭極惡之主、而無悞國之罪。守正俟死、元始以來、女伴所希矣。(前掲「校注蕭鴻記・一」参照。)

(22) 前掲「校注蕭鴻記・一」参照。

(23) 主要作品のみ。王建・李商隱その他の関連作品については「全唐詩」、また清・胡鳳丹編『馬嵬志』(榮發出版社、一九六七年、據光緒三年版影印出版。また江蘇古籍出版社、一九九〇年、嚴仲儀校點出版)参照。

梅妃から見た「長生殿」の楊貴妃像

照。更に新編著「長恨歌及同題材詩評解」(中州古籍出版社、一九八九年)参照。但し、該書は鄭炳「津陽門詩」の詳解を缺く。また杜常「華清宮」詩については、拙稿「三體詩」に誤入する杜常「華清宮」詩をめぐって「町田三郎教授退官記念中國思想史論叢」、中國書店、一九九五年)参照。

(24) 妖其容、巧其詞、歌舞談笑、婉便便、以中上心。(『文苑英華』卷七九四所引「麗情集」、汪辟疆校錄「唐人小說」参照。以下注(24)(25)(26)は同校錄本に據る。

(25) 非徒殊艷尤願致是、蓋才智明麗、善巧便便、先意希旨、有不可形容者。

(26) 高橋文治氏「長恨歌」とその子孫たち(『東洋文化學科年報』五、追手門學院大、一九九〇年)もこの部分を引き、楊貴妃を「妖嬈」とし、「長恨歌傳」は「理想の二人を飄渺せずにはおかなかった」と述べる。

(27) 白居易「長恨歌」では、「漢家の天子の使い」が來た事を知った楊貴妃が、あわてて「花冠も整えず、裳を下りて來り」、すぐさま使いの方士に會おうとする。これに對し、陳鴻「長恨歌傳」では、この様に、楊貴妃との面會を求めた方士は、門前で一晩待たされ、翌朝おもむろに對面するに及ぶのである。些事ながら、ここにも陳鴻の楊貴妃に對する冷徹な批評眼が現れていると筆者は考える。

(28) 意者不但感其幸、亦欲懲尤物、空亂階、垂於將來者也。

(29) 生亦惑 死亦惑 尤物惑人忘不得 人非木石皆有情 不如不遇傾城色

(30) 樂天深於詩、多於情者也。

(31) 白居易「與元九書」に「校大詩曰、我獨得白學士長恨歌、豈同他妓哉、…諸般見後來、指而相顧曰、此是案中吟、長恨歌主耳。」とある。

遠藤實夫『長恨歌研究』（建設社、昭和九年）

水野平次『白樂天と日本文學』（目黒書店、昭和五年。大學堂書店、昭和五七年。藤井貞和補訂。）金子彦三郎『平安時代文學と白氏文集』（原

版昭和三〇年。鶴林舍藏刻、昭和五二年。）

近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院、昭和五六年。）

(31) 但し、『梧桐雨』については、安藤山の白に「只是我與貴妃有緣私

事」（夢子）、「撞了貴妃、奪了唐朝天下、纔是我平生願足。」（第二折）

とあり、その『汚穢』描寫を根柢として屈み陳う餘者も多い。筆者は、

この部分は『天寶遺事諸官圖』などの通俗作品にまみ見られる低俗で獵奇的な描寫が混入したものと考へる。

(32) 『渭江紅』今古情場、問誰個風心到底？ 但果有精誠不散、終成運

理。……百情取義官微、借太真外傳諸新詞、情而已。

(33) 史載楊妃多汚穢事。予撰此劇、止按白居易『長恨歌』、陳鴻『長恨

歌傳』爲之。而中間點染處、多采天寶遺事・楊妃全傳。若一涉穢跡、恐

妨風教、絕不闖入、覽者有以知予之志也。

(34) 凡史家載籍、概創不書。

(35) 南曲『驚鴻』一記、未免涉穢。

(36) 名は離一、字は吳山、錢塘人。『國朝杭州府志』續編卷二、『杭州府

志』卷九四等に傳がある。章培恆『洪昇年譜』（上海古籍出版社、一九

七九年）二〇二頁參照。同書二八頁に據れば、洪昇は吳興一より三歳年

長である。

(37) 今『長生殿』行世、伶人苦于繁長難演、竟爲偷壁去加節改、關目都

廢。吳子慎之、故『墨影十四種』、更定二十八折、而以發國、梅妃別爲

機殿兩劇、確當不易。

(38) 近唱演家改換、有必不可從者。如增『我國家寵』、楊妃怨等、一

改、作三家村婦醜態、既失國體、尤不耐觀。

(39) 有客曾論、此劇發國・梅妃兩番爭寵、皆未當場扮出。關目近於不

顯、欲於排場、加楊・國相爭、然後放歸。「蘇閣」折中、破壁而出時、梅妃調場走下。近演家有扮梅妃默坐機內者。

(40) 朱彝尊の『長生殿』序に「其用意、一洗太真體」と。但、この序は朱彝尊の『曝書亭集』中に收めない。

(41) 吉川良和「もう一つの『長生殿』の世界」（いま、日本と中國を考へる）神奈川大、一九八九年）參照。

(42) 『寶治通鑑』卷二五、および「太真外傳」卷上參照。

(\*) 本稿を成すに當つて、清水茂、入谷仙介兩先生から貴重な御助言を賜つた。記して感謝申し上げる。